

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

筆者はハンドボールを10年間、ゴールキーパーというポジションを専門に取り組んできた。そして2007年・2008年には念願の全国大会出場を果たすことができた。しかし筆者自身、身長176cmとゴールキーパーとして体格に恵まれていたわけではなかった。それでも今まで戦ったチームの、体の大きく位置取りや面の作り方の巧いゴールキーパーと互角に渡り合ってきたのには、シューターとの一対一でのかけひきが要因にあると考える。ゴールキーパーにとって大事なものは多いが、シューターとの一対一でのかけひきこそ、小さい選手が大きな選手に対抗しシュートを止めるための最も重要なファクターだと考えた。そこでどのようなかけひきがシューターに対して有効であるか研究したいと考えた。本研究では、KurtMeinel(クルト・マイネル, 1981)のスポーツ運動学を参考にし、運動モルフォロジー的立場からゴールキーパーのかけひきを分析・考察していく。今回の研究では筆者の在学する、秋田大学ハンドボール部のゴールキーパーにインタビューを行う。インタビューに基づいて、調査対象となるゴールキーパーが実際のプレーで実践し、効果のあった得意とするものを印象分析する。そして、そのかけひきの動きのどの部分がシューターに対して効果的なのか、筆者のキーピングと照らし合わせ他者観察・自己観察を行う。そこで得られた結果と、同じく秋田大学ハンドボール部のコートプレーヤー8名に行ったアンケート調査の結果を照らし合わせ、コートプレーヤーの思考とゴールキーパーの狙いを比較しながら筆者も含む秋田大学のゴールキーパーのキーピングにおけるかけひきの有効性について考察する。

<本論>

第一章 ゴールキーパーの構造体系・位置づけ、かけひきとは何か

この章ではゴールキーピングのことを研究していく上で、まずハンドボール競技におけるゴールキーパーの構造体系、またゴールキーパーというポジションがハンドボール競技のなかで、どのような位置を占めているのかということを理解し、考えてみる。そして本研究で扱うかけひきとは何か概念規定を行う。その結果、様々な資料を参考にゴールキーピングの基本的な構造を理解し規定することができ、ハンドボール競技においてゴールキーパーが特殊な位置づけであることも分かった。かけひきは「明確な結果の先取りに基づき、それを達成するための固有の諸徴表を持った、ゴールキーパーのシューターに対する動作やフェイント」であると定義付ける。ゴールキーピングのかけひきを分析するにあたり、インタビューを行うゴールキーパーにも基本的な構造体系を理解してもらった上で話を聞くことで、運動の観察・共感がしやすくなり本研究において有効なこととなる。

第二章 ゴールキーパーのかけひきについての例証分析

この章では、まずモルフォロジー的考察を行う際の、諸カテゴリーの概念規定を行う。その後インタビューに基づいてキーピングを印象分析し、筆者自身もその運動に共感し自己観察を行い分析する。「運動質」の諸カテゴリーは、①運動の局面構造 ②運動リズム ③運動の伝導 ④運動の流動 ⑤運動の弾性 ⑥運動の先取り ⑦運動の正確さ ⑧運動の調和の八つがあるが、本研究では「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」が重要であると考え、これらのカテゴリーを基に実際の分析を行う。分析の結果、それぞれのかげひきの構造を理解し、重要となるカテゴリーとその諸徴表を確認できた。

第三章 ゴールキーパーとシューターの意識の比較

第二章の分析でかけひきの固有の諸徴表が確認できたが、有効そうに見える徴表でも、シューターがそれを意識しなければ、そのかけひきは有効でないとはいわざるを得ない。

そこで、秋田大学ハンドボール部のコートプレーヤー8人に行ったアンケート調査の集計結果と、諸カテゴリー分析と自己観察から得られたゴールキーパーのかけひきの徴表とを比較し、コートプレーヤーに対しそれぞれのかげひきが効果を発揮しうるものかを考察する。その結果、どのかけひきの徴表にも、コートプレーヤーが意識しているという結果が得られたため、シューターに対し効果が期待できるということが考察できた。

<結論>

本研究では本研究では秋田大学ハンドボール部に所属する筆者も含めた3人のゴールキーパーから抽出した5つのかけひきを分析・研究した。その結果シューターと一対一のかげひきには、いくつかのグループがあることがわかった。

- 1.軸足側の空間の誘い・上コースの誘い・浮かし誘いなど「運動の先取り」における「フェイント」の徴表が最もよく表れるの“誘い”のかけひき
- 2.位置取りをアウトにずらし遠目潰しなど、相手の「運動投企の先取り」、「目的の先取り」を読み切りキーピングする“待ち”のかけひき
- 3.飛び出しなど、自分の「運動リズム」を急激に変えることで相手の「運動リズム」を乱し間違った「運動投企」を起こさせる“しかけ”のかけひき

筆者は、本研究の一対一でのかけひきは、全てこの3類型にまとめられると考える。

また本研究では、分析したかけひきの有効性をアンケート結果より考察したが、「この場合はこのかけひきが有効」「このかけひきは誰に対しても有効」といった明確な答えは得られなかった。しかし、ゴールキーパーが意図したかけひきの徴表をコートプレーヤーがどうとらえているのか知ることができ、限りなくあるかけひきの中で、どういった徴表が効果的なのかを把握することができた。そして分類した3つのかけひきの類型、それぞれに個別の実戦で効果の期待できる徴表があることがわかった。今後はより多くのかけひきを分析し、実践や指導に活かせるよう研究を深めていきたい。